

クリスマスメッセージ

夜明けは近い

井口 真 (東京 Y M C A 主事、東京 Y M C A 高等学院 学院長)

更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。

(ローマの信徒への手紙 13 章 11 節～12 節)

「眠りから覚める時が既に来ている。」もう起きる時間だよというわけです。

私は普段通信制高校の学院長をしていますが、この言葉は、生徒たちには聞きたくない言葉かもしれません。「まだ眠いよ」とか。いつまでも寝ていると、優しく起こしてくれていたお母さんもだんだん不機嫌になって、「いい加減にきなさい！」とか。でも、そうではありません。「夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。」夜が更けて、朝が近づいて、まだ暗い。そんな時間。暗闇の生き方を脱ぎ捨てて、光の装備を身にまといましょう。そういう誘いの言葉です。

私は大学時代に、岩手県の折壁村という過疎の村で 4 年間合計 16 回、現地の子どもたちを集めるキャンプをやっていました。正確には教会に泊まっているとそこに村の子どもたちが毎日やって来るというものでした。

そこで、本物の闇を経験しました。朝ごはんを食べる頃にやって来て、晩ごはんも一緒に食べて、そして帰る。もう外は日が暮れていますから送っていくんです。東京から来ている私はつい癖で、懐中電灯を持たずに送りに出かけます。でも街灯は少ないし、途中ですぐに道は林に入ってしまう。途端に濃密な闇になるんです。皆さんは経験したことがありますか？ 自分の手を目の前に出しても見えない。すると自分が本当にここにいるのか不安になります。体があると思っている意識だけがここに浮かんでいるだけかもしれない。子どもは平気ですたすと歩いてい

くんですけどね。

今は電気もあるし外でもコンビニや自販機があつてずっと明るい。本当はこんなの不自然ですね。自然の夜は恐怖を感じるくらいに暗い。

人は、真っ暗で先が見えない状況に、根源的な恐怖を覚えます。新型コロナはこれまでに私たちが作り上げてきた社会の矛盾を炙り出しました。震災も、不況も、何か起きるたびに私たちが普段から「仕方がないよね」と見ぬふりをしてきたものを見せつけます。そして一番弱くされている人たちの声は、耳に届かない。空気を震わせないのです。自分のことで精いっぱいだから、と聞こえても聞こえないふりをしてしまう。

**あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。**

そこに朝日が昇ると一気に世界は変わります。以前、生徒たちとナイトハイクをやったんです。夜中が得意な生徒は大活躍です。歩き始めた夜は空も黒いんですけど、夜明けが近づいてくると、だんだん空が青くなってくるんです。朝日はまだ昇らない。空が白んで明るくなるっていうほどでもない。夜明け前の特別な時間。まだ朝は来ていないけど、夜明けは近い。それはわかるんです。そして確実なことは、明けない夜はないということ。決して後戻りはしないということです。

クリスマスが今年もやって来ます。暗闇の中に希望の光が生まれる。見て見ぬふりをしない方、十字架について、見て見ぬふりをする私たちを赦す方が生まれる。それがクリスマスの意味じゃないかと思います。だから私たちもイエスの光の武具を身に着けましょう。毎年イエスさまは生まれてくださる。それは「希望はある。」ということだと思います。クリスマスが来るのを心から歓迎し喜びたいと思います。